

木村護郎クリストフ先生のレクチャー

“キリスト教(徒)は原発とどのように向き合うか  
～環境神学の思想と実践から～”

応答的ディスカッション  
・東洋倫理の視点から

山本 良一  
国際基督教大学 客員教授

## 原発に対する宗教界の見解

- ◆『原発に対する宗教界の見解』 藤山みどり(宗教情報センター)2012.1.30
- ◆原発停止を求める日本のキリスト教界
  - 日本キリスト教協議会(NCC) 2011.4.11
  - 日本カトリック司教団 11.8
  - 日本バプテスト連盟 11.11
- ◆脱原発に転じたバチカン
- ◆脱原発を掲げる仏教教団
  - 全日本仏教会 「原発に依存しない社会の実現を求める」 2011.12.1
- ◆原発を容認する宗教団体
  - 神社本庁(核兵器には反対)
- ◆ダライ・ラマ14世
  - 様々な角度から問題を捉えて全体的なものを見方をすることが大切

## 各種エネルギーの比較

	1kwhあたりの CO <sub>2</sub> 排出量	資源量	温暖化 対策コスト	廃棄物	人間性の 弱さを考え た時、市民 社会は管理 可能か
化石燃料	多い	有限		CO <sub>2</sub> は大気中 に千年から 1万年残留	使い続けれ ば超温暖化、 不可能
原子力	少ない	有限 (ウラン)	少ない	放射性廃棄物 10万年間管理 の必要性	不可能
再生可能 エネルギー	少ない	ほとんど 無限	多い	リサイクル 可能	可能
気候工学			少ない	少ない	副作用多く 不可能

# 神道、神の概念

## 神社本庁のホームページより

神道には自然及び人間をも創造した、この世界を超越する絶対神の信仰はない。

“尋常(よのつね)ならずすぐれたる徳(こと)のありて可畏(かしこ)きものをば神とは言ふなり”(本居宣長)、徳とは他に影響を及ぼす大きな力、働きの事であり、人間にとって好都合であり幸いをもたらすこともあるし、逆に不幸や災いをもたらすこともある。神道では決して西洋人の言う物質として一定の法則に従って働く自然を人格化し、或いは神格化して礼拝しているのではない。自然の中で人間の生活に特に大きな影響を及ぼす力そのものに神霊を感得し、その神霊に祈年し礼拝しているのである。神道は多元真理観、個別の個別性にこそ真理があると考えられるので、常にお互いの譲り合いによって共存が可能と考えられている。

神道の神話では、全智全能の神は語られていない。

最高神天照大神さえ、弟神と心の真実を判定する争いに敗れているし、唯一例外的な能力を持つ神として語られている九延毘古(くえびこ)神も、世の中総ての事を知りながら、一步も動けぬ神なのである。

# 読売新聞1月8日号“両座主対談”



空海

四大は如来の三昧耶身

草木国土悉皆成仏



最澄



魂宿る自然と生きる

1200年ぶりの対談

松長有慶第412世座主 物心一如



半田孝淳第256世座主 忘己利他

# 六大説という生命哲学

ref. 「大宇宙に生きる空海」松永有慶

- 地、水、火、風、空の五大と識大を合わせたもの。  
六大は宇宙の構成要素とはみなさずに、大日如来の個々の象徴だと考える。宇宙全体の大きな「いのち」が個々の性格に分かれて、互いに深いつながりをもちながら表現されているとみる。
- 六大は三種世間を生ず。  
仏の世間つまり大宇宙と、衆生世間つまり人間をはじめとする生物全体の世界と、器世間つまり無生物の世界。
- 一つの宇宙全体の中に、仏も生物も無生物も同じく包まれていて、同じ「いのち」として存在しているのだということになる。  
個体の総和が全体ではなく、個体の一つ一つの中に全体が含まれている。  
あらゆる存在が本来は大日如来であるという考えを密教は持っている。  
大日(ヴァイローチャナ) = 遍照、絶対の真理の世界

# 胎藏曼荼羅



この多種多様な仏尊の集合は  
また、釈尊以来の仏教体系の  
集約であり、「無執着」「無明や  
六道からの解脱」の釈尊仏教  
を越え、「無我」の小乗を越え、  
「縁起」「無自性」「空(性)」の  
大乗を越え、「空(無)」と「非空  
(有)」の二律を越えて、密教が  
「真如・法如(そこにそうあるべ  
くしてあり、そうなるべし)とな  
る、宇宙の真理)＝「実相」  
のである法身大日如來(「実  
在」(有)であること)を仏  
教を統合した



# 外金剛部院

文殊院

釈迦院

遍知院

中台  
八葉院

持明院

虚空蔵院

蘇悉地院

地蔵院

蓮華部院

金剛手院

徐蓋障院

エコプロダクツ展示会、グリーン購入、エシカル購入

エコデザイン・サステナブルデザイン

エコロジー宗教

地球システム科学

暴走する資本主義経済の制御

資源  
パネル

SR

倫理  
パネル

共生

幸運な宇宙と  
奇跡の惑星  
・地球

惑星  
スチュワード  
シップ

気候変動  
パネル

EMS

生物多様性  
パネル

環境NGO・環境アントレプレヌール

ミレニアム・持続可能開発目標

生態系の恩恵

グリーンエネルギー

国際環境条約

ソーシャルイノベーション・サステナブル経済

エコ生代 (Ecozoic Era)

人類文明と自然が  
調和発展する時代

自然保護運動、シンプルライフ、環境福祉活動

## 環境胎蔵曼荼羅

山本良一



# 環境胎蔵曼荼羅における中台八葉院 四仏と四菩薩

倫理パネル  
(IEP)

気候変動パネル  
(IPCC)

社会的責任 (SR)

共生

幸運な宇宙と  
奇跡の惑星  
地球

惑星スチュワードシップ

環境マネジメントシステム

生物多様性パネル  
(IPBES)

(EMS)

資源パネル  
(IRP)

# 「草木国土悉皆成仏」の意義について

竹村牧男

地球システム倫理学会ホームページ

忠尋(1065～1138)の説には、自己と自然の関係に関して、簡略に言えば、

- 1 自己と自然は不二であり、切り離せない(依正不二)
- 2 自己の完成と自然の完成は連動している(諸仏観見)
- 3 自然の一つ一つが、自己と自然を超える究極のいのちに貫かれている(具法性理)
- 4 自然の一つ一つは、他のあらゆる存在と関係し、他を自己としている(具中道)
- 5 自然の一つ一つは、もとより靈性的内実を有している(本具三身)
- 6 自然の一つ一つは、それ自体において絶対的な価値を有している(当体自性)
- 7 本当の自然および自己は、言葉を離れている(法性不思議)

といった了解が含まれている。ここには必ずしも天台の本門という特異な説に傾きすぎていない、自己と自然のいのちの深い自覚を見ることができるであろう。

# 「草木国土悉皆成仏」の起源

ref. 「小さな小さな生きものがたり」日本の生命観と神性、岡田真美子編  
山川草木のいのち、岡田真美子より

- 草木やモノのいのちを人のいのちと等しくみる日本の生命観に叶う仏教思想を日本が選びとり「草木国土悉皆成仏」という表現を生んだ。
- 「草木国土悉皆成仏」という成句は日本天台の安然の著した「懃成私記」(869-885年成立?)にさかのぼる。中国天台の湛然の非情成仏説と100年も開いていない。
- 安然が現在最古の「草木国土悉皆成仏」を記した「懃定草木成仏私記」の筆を執った年はまさに貞観地震、大津波の869年(貞観11年)であった。
- 「草木国土も皆悉く成仏しますように」という願いや祈りのことばであった。私たちは過去も現在も、否応なしに自然の脅威にさらされて、なすすべもなく立ち尽くして、失った身内、輩、草木、けもの、国土の冥福を祈りつつ、生き延びてきた。

# 悉有仏性論と東アジア的宗教感性

ref. 岡田真美子「東アジア的環境思想としての悉有仏性論」

- 植物も国土（無機的な環境世界）も成仏するという思想は単に外来のものではなく、日本的生命観（人もけものも草木も、山や川ですら、そのままの姿で生きている）にもある。
- 荘子の「万物斉同」  
“形をもって存在するすべてのものは、存在するだけの必然性をもってこの世に存在しているのであり、万物がそれぞれに必然性をもって存在しているというその限りにおいては、草木であれ、土石であれ、あらゆる形をもって存在するものは人間を含めて平等であり斉同である”  
悉有仏性論は王陽明の「伝習録」などにも生き続けた。
- 草木瓦礫にころをみるというのは中国も日本も共に仏教前からあった考え方である。この感性に仏教が「悉有仏性」、「悉皆成仏」という美しいことばを与えたというわけである。中国の非情成仏論は抽象的、原則論、これに対して日本は常に具体の草木が人と同じように修行し、成仏する様を考えている。
- 山に山ノ神が宿っていると考えるのではなく、山を一個の生ける存在と見る感性である。またこれは赤潮の海や削られた山を痛々しいと思う感性である。  
環境世界には環境世界のいのちがあること、そのいのちは自分のいのちとつながっていることを感じ共感しようとする感性に支えられた悉有物性論

# 草木成仏の思想 末木文美士著(サンガ、2015)

安然・・・9世紀後半に活動した天台の大学者

“草木成仏論のもととなる無情成仏論はすでに中国でも論じられているが、その主流は有情が覚りを開くときに、環境(依報)である無情もまた覚りの世界となるという意味で、あくまで有情に依存するものであった。ところが、安然は当時の日本の天台の議論を受けて、「斟定草木成仏私記」において、草木が自ら発心・修行・成仏するという草木自成仏説を主張した。ただし同書においては、それが十分に論証されるに至らなかった。

「教時問答」を経て、「菩提心義抄」において、随縁真如の思想が展開され、それによってはじめて有情と無情は同じ根源的な真如に由来するものとして同等視されることが可能になった。”

“安然以後、本覚思想などで草木成仏思想がさらに展開されるが、根本の問題は、はたして有情と無情が同等化されるのか、それとも無情の草木は有情の主体性に依存するものと見るか、という点に集約される。両者が同等視されるのは、確かに無情の草木の独自性を認めることにはなるが、他方で自然に対する人間の責任を曖昧化する面が生ずる。無情の有情化とは、逆に言えば有情の無情化でもあり、有情である人間もまた、無情である草木のように、あるがままに任せればよいという無責任に陥る可能性を秘めている。その点で、有情の主体性を重視する立場もまた、考慮する必要がある”(p181)

## 神道と習合した仏教思想

真言宗「六大説という生命哲学」

天台宗「草木国土悉皆成仏」

ものには命があり、自己と自然は不二であり切り離せない環境を汚染することは自己を汚染することである（環境保全に有利）。

一方、草木成仏思想により自然に対する人間の責任がいまい化する面が生じた（環境保全に受動的）。

## キリスト教

惑星の信託管理 (Planetary Stewardship)

環境保全のための自然への積極的介入を認める

日本の伝統宗教の環境倫理と  
キリスト教の環境倫理は相補的ではないか

# 行動するのは今だー気候変動についての仏教者の宣言

The Time to Act is Now

– A Buddhist Declaration on Climate Change 2008

今日、私たちは大変な危機の時代を生きている。人類はかつてないほどの深刻な挑戦を受けている。それは私たち人類の集団としてのカルマのエコロジカルな結果である。人間活動がプラネタリースケールで環境破壊を引き起こしていることに関して、科学的証拠は膨大である。

**北極海氷の急減、グリーンランド氷床の融解、海面水位の上昇  
氷河の急速な後退、水供給の減少、2030年にも大規模な環境難民の発生、  
海洋酸性化の進行**

人類文明の存続が危ぶまれている。

仏教の四たい(The four Noble Truths)が分析と解決のためのフレームワークを与える。

サステナブル経済はSufficiency Principle(充足の原則)に基づくべきである。

ジェームス・ハンセンの気候安定化のためのターゲット、CO<sub>2</sub>濃度350ppmを支持する。

ダライラマ法は350ppmターゲットを支持し、この宣言に最初に署名した。

Future generations, and the other species that share the biosphere with us, have no voice to ask for our compassion, wisdom and leadership.

We must listen to their silence. We must be their voice, too and act on their behalf.

# 化石燃料への投資を止めて再生可能エネルギーへ 投資することを支持する声明

80名余の神学者、倫理学者、宗教指導者が署名

“A statement from Theologians, Ethicists and Religious Leaders in support of fossil fuel divestment and clean energy reinvestment by faith communities”

2014年

地球は素晴らしい贈物である。それは生命を支える。それは私たちの経済の基盤である。それは美を示す。それは私たちを超える何者かを認識させる。それは私たちの寺であり、モスクであり、聖なる場所であり、大聖堂である。それは私たちの家である。

今日、地球上の生命のバランスは気候変動によって危機にさらされている。

このままでは人間社会と地球生態系は劇的に劣化した状態で未来の世代に残されることになるだろう。2013年に科学者は気候ターゲット2°Cを守るためには残されたCO<sub>2</sub>排出量は5000億トンと計算した。既知の埋蔵量を燃やすと3兆トンの排出量になり、このしきい値の6倍にもなる。化石燃料産業はCO<sub>2</sub>削減のための法律策定、目標設定を妨害するために莫大な資金を投じて来た。米国政府へのロビー活動だけで1日40万ドルに達する。補助金は1日、全世界で15億ドルに達する(IEA)。2013年に新たな資源探査に6000億ドルが投入されたが、再生可能エネルギー開発には2440億ドルにしか過ぎなかった。

信仰コミュニティは法律制定を要求し、省エネをしてカーボンフットプリントを下げるためだけでは不十分である。世界の信仰界は化石燃料への投資を止め、再生可能エネルギーへの投資を急ぐべきである。

ジョン・カブやサリー・マクフェイグらも署名している。



# 環境危機は倫理的危機

1. 経済のグローバル化で  
どこの誰がどのように生産し、流通させているか  
不明の商品が急増
2. 科学・技術の発展で  
使って良いかどうかの倫理的判断が困難な商品  
サービスが急増
3. 社会システムの改革の遅れで  
環境問題、社会問題の解決に消費者市民が積極的に  
関わることができない

# 倫理的消費の分類

2015.4.20作成  
山本 良一

	生命倫理	環境倫理	社会倫理
法 (Law) (国家による強制力のある社会的規範)	臓器移植	グリーン公共調達 グリーン公共契約	障害者製品優先調達 地域貢献企業支援制度
倫理 (Ethics) (かなり普遍的な社会的規範)	延命治療／尊厳死	グリーン購入 エコマーク認証 FSC認証 MSC認証 有機認証  国産材利用促進 バイオマス活用促進	応援消費  フェアトレード RSPO認証 エシカルファッション エシカルウェディング CSR調達 社会的責任投資 環境金融 CSV(共有価値創造) CRM
道徳 (Moral) (個人あるいは小集団の規範、価値観)		環境観光  ベジタリアン 動物福祉製品	寄付付き商品購入  ボイコット
今後の課題	スーパーヒューマン技術、 デザイナーベビー		ICT/人工知能/ロボットの倫理